

自然誌 だぶり 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 147号

2026年 3月



オオサンショウウオの幼生は厳冬期に巣穴から出てきます。まだ運動能力は高くありませんので、落葉が流されるように流下し、落葉が溜まる川底に居つきます。そこには、羽化前の水生昆虫が豊富にあり餌には困りません。一方、この時期は魚などの捕食者の活動は低下しており、食べられるリスクは低いと思われます。食べ物が豊富で、食べられる心配の少ないこの時期に幼生期を過ごすことは理にかなっている一方、調査する側にとっては不条理です。今年一番の降雪をみた2026年2月8日、名張市阿清水川でひたすら落葉をさらい、幼生の調査を行いました。

(清水善吉：松阪市日丘町1386-17)

東紀州に出現したジャンボ植物，ヨシススキ（その5）

山本和彦

ヨシススキは、紀勢自動車道と熊野尾鷲道路を発生源としてその周囲に分布を広げています。これまで筆者は、自動車道が走っている紀北町、尾鷲市、熊野市内におけるヨシススキの分布状況を報告してきました(本誌138, 139, 141, 143)。今回はまだ自動車専用道路が建設されていない御浜町内でヨシススキの分布を調べてみました。御浜町内には海辺に国道42号、山手に国道311号が、また町内をほぼ縦横に縫うように5本の県道が走っています(図1)。調査はこれらの国道沿いと県道沿い、および主要な道路沿いで、2025年9月、11月と2026年2月に行いました。調査の結果、御浜町内で確認された生育地は、他の地域と比べ少なく、5地点あることがわかりました(図1)。町内全域は調べていな



図1 御浜町内で確認されたヨシススキ生育地。①志原川右岸河口の国道42号沿い、②新緑橋北側の国道42号沿い、③阿田和橋より南約400mの国道42号沿い、④砂方池の堤体、⑤柿原地内の県道141号沿い。

いので、精査をすればまだ生育地点数は増えるかもしれません。以下に5箇所の生育状況について報告します(①～⑤は図1に対応)。

① 志原川右岸河口の国道42号沿い

2026年2月に2株確認、1株は新志原橋南側の袂に(図2)、もう1株はそれより約30m南側に離れた国道沿いの空き地でした。Googleマップのストリートビューをみると、ヨシススキは2024年12月の画像には写っていますが、それ以前は写っていません。ただこの個体は橋の袂のもので、



図2 新志原橋の袂に生育するヨシススキ(白線枠内)。(2026年2月24日撮影)

空き地の個体は2024年にも写っていませんでした。橋のたもとの個体は、2024年より少し前に、空き地のそれは少し遅れて入り込んできたものと思われます。

② 新緑橋北側の国道42号沿い

新緑橋北信号機の海側に大きな株が1株みられます。ストリートビューから、2019年までは何も生えてなかったところに、2021年になると小さなヨシススキが入り込んでいるのがわかります。2023年もそれほど大きさは変わっていませんが、2024年になると倍ぐらいの大きな株となっています。



図3 砂方池の堤体に生育するヨシススキ(白線枠内)。(2026年2月24日撮影)

③ 阿田和橋より南約400mの国道42号沿い

国道脇のコンクリートの隙間から1株のヨシススキが出ています。2023年4月のストリートビューにはヨシススキは全くみられませんが、2024年11月には大きく成長して穂を付けている個体が写っています。短期間でこれほど成長するには驚きです。

④ 砂方池の堤体

砂方池は上市木の県道141号沿いにあるため池です。この池は明治時代に築造されたようで、老朽化のため2020年から2023年にかけて堤体の改修工事が行われています。改修前は堤体にササユリ、フナバラソウ、スズサイコ、キンバイザサ、フサスゲ等の絶滅危惧種が生育していました。これらの希少種は別な池に移植されており、2026年2月現在の堤体には、メリケンカルカヤやコセンダングサ、ナルトサワギク等々の外来種が繁茂しています。さらに堤体の東端には、3株のヨシススキが入り込んでいるのを確認しました(図3)。2024年にこの池を訪れたときには、ヨシススキはまだ生えていなかったという記憶がありますし、当時の写真にも写っていません。

ヨシススキは、改修工事が始まった2020年頃から2024年の間で侵入に成功し、その後徐々に成長し、2025年には急激に大きくなったと思われます。早急に駆除しないと堤体全体がヨシススキに覆われるのではと危惧される場所です。

⑤ 柿原地内の県道141号沿い

県道141号沿いの西側空き地で2026年2月に1個体確認しました。この空き地にはコルゲートパイプが何本か積まれており、その隙間からヨシススキが伸びていました。ストリートビューをみると、コルゲートパイプは2014年から同じ位置に置かれていて、ヨシススキは2024年に初めて出現しています。ここも1個体ですが、自動車道が開通してから10年余の年数を経て侵入に成功しているようです。

以上が御浜町におけるヨシススキの生育状況です。ヨシススキが東紀州に入り込んでから12年ほどになりますが、この間ヨシススキは急速な勢いで分布を拡大し、いまや東紀州の海辺から山の中にも広がっています。これまでの調査から本種の生育地は、他の植物があまり生えていない裸地に限られているように見受けられます。御浜町内には、そのような立地が散見されることから、今後ヨシススキの個体数が増大することが懸念されます。次回は紀宝町での生育状況を報告します。

(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40)

ノスリの落鳥個体回収について

上 田 利 彦

2026年1月23日14時頃、鈴鹿市越知町の一般国道23号中勢バイパス上り線左路肩においてノスリの落鳥個体を確認しました、その後の顛末について記録しておきます。

本種は、背面は濃い褐色、胸から腹にかけては黄白色で脇が褐色、飛翔中はトビに比べ白っぽく見えるのが特徴のタカ類です。三重県内では秋から春にかけて里山に近い平地で、電柱の先端に停まって獲物を探している姿を見ることができ



写真1 回収直後のノスリ（2026年1月23日、鈴鹿市越知町）

ます。さて、そうした姿はよく見ることができますが、なかなか落鳥と出会うことはありませんので、これはお宝！と迷わず回収しました（写真1）。死後間もなかったのかまだ柔らかく、また、外見上大きな損傷はなく綺麗な個体でした。手にしたとき、思ったよりも小さいこと、そして軽いという印象がありました。こうして実際に個体を手にして観察できることは非常に貴重な経験であり、標本の必要性を実感できます。

さて、個体回収は勤務中でもあり持ち運びは難しかったので、三重県環境保全事業団で預かってもらおうと電話で状況を説明してから持っていったのですが、事業団から博物館へ連絡、博物館から津農林水産事務所に情報提供され、最終的には三重県中央家畜保健衛生所行きとなってしまいました。おりしも県内の養鶏場で10数年ぶりに鳥インフルエンザが発生したところでもあり、またノスリは高病原性鳥インフルエンザに係る死亡野鳥等調査の第1優先種でもあることから、当然の対応ではあります。鳥インフルにしる、豚熱にしる発生するたびに関係者の経済的損失はもちろんのこと、その対応にあたっては県職員の方々が体力的にも精神的にも随分苦勞していることはよく知っているの、その対応は仕方ありません。とはいえ綺麗な個体だったのでやはり勿体ないと思い、家畜保健衛生所に、検査の結果陰性であった場合は標本として残すため提供していただけないか？と聞いてみたところ、担当の方は標本の意義を理解して諮ってみるとのことでしたが、後日、たとえ陰性であったとしても他の感染症などの防疫の観点から検体の提供はできないと判断されたと連絡がありました。

少しこの件について調べてみたところ、環境省のホームページで『野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル』（環境省自然環境局2025）が掲載されており、死亡個体の保管と廃棄の項目に、「死亡個体は、遺伝子検査等の結果が出た後に廃棄するが、研究等に活用する場合は環境省や検査機関と調整を行い、死亡個体の移送、凍結保存を行う」との記載があり、やはり希少な個体については残す手立てが設けられていることがわかりました。研究目的というのがどの程度のものなのかは計り知れませんが、個体標本の収集・保管に関して博物館と関係機関との調整により何とか貴重な資料を残せなかったものかと思えます。

なお、当該マニュアルでは野鳥の死亡個体については細心の注意を払って回収・検査・廃棄することが細かく記されており、その観点からは今回の私の行動は推奨されるものではありません。落鳥を見つけた場合は、鳥インフルエンザに係る野鳥に関する問い合わせ先である地域の県農林水産事務所

へ連絡することになっています。ちなみに、回収後ふと気づくと私のスーツの袖先には全長2mmほどの細く白い虫が数匹蠢いていましたが、運転中のうえ小さすぎて、残念ながらこの虫の回収はできませんでした。

当然のことながら、野生生物にはダニやノミやいろんな寄生虫がついていますので、むやみに触ることはお勧めできません。以前自然誌だより135・136号でも話題になったダニの感染症のこともありますし、今の時代、野生生物の死骸を素手で触る、などというのはまったくタブーのようです。

引用文献

環境省自然環境局2025. 野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル。
<https://www.env.go.jp/content/000343756.pdf>

(うえだ としひこ：津市久居一色町176-1)

令和7年夏・新鹿海岸でみつけたカニ

上 田 利 彦

かれこれ30数年、ほぼ毎年夏には熊野市新鹿海岸でキャンプを楽しんでいます。今季は2025年7月26日でしたが、汀線からやや陸地側で5~20mmほどのカニの巣穴がこれまでになく沢山あることに気付きました。そのうち幾つかの巣穴の前にはコメツキガニのものとよく似た、だけど不揃いでばらけた感じの砂団子が確認できました。以前報告(本誌143号)した高松海岸のコメツキガニの粒ぞろいの砂団子と比較して、向こうは干潟で有機物の多い砂、こちらは白砂の海岸でサラサラなのでその違いか? くらいに思いながら、高松干潟でコメツキガニを採集した要領でいくつかの巣穴を掘ってみました。カニを見つけることはできませんでした。10か所ほど掘ったでしょうか、諦めてテントに戻ろうとしたとき、偶然足元を素早く走って逃げる甲幅10mmほどの白っぽいカニを見つけ追っかけました。

そのスピードたるや! おそらく秒速2m以上か! ? しばらくあっちへこっちへとジグザグに方向を変えて逃げるカニをバタバタと追いつづけた挙句、打ち上げられたごみの陰に隠れたところをようやく捕獲することができました。コメツキガニに似ているようですが、歩脚が長く、甲はクリーム色の地色に薄い茶褐色のモザイク模様と、その走るスピードはけた違いであることからコメツキガニと別種であることは想像がつかしました。

1個体ではさみしいのでしばらく砂浜にはいつくばってカニ捕りに没頭しました。コメツキガニのときは巣穴の周りを数回大きく掘り起こし、掘上げた砂を注意深く掻き分けるとそこに潜んでいるような感じで採集できましたが、今回のカニは数回掘り起こすうちに掘り出された砂山から抜け出すやいなやシャシャシャシャッ! と走りだし、近くにある別の巣穴(同一個体が複数の巣穴を持っている?) に逃げ込むか、あるいは砂浜のスロープを一気に駆け下り波打ち際で碎波に紛れて砂に潜って隠れてしまうことがわかりました。どうりでのんびり掘ったのではその姿を見ることができなかったわけです。

さて、3個体を持ち帰り観察したところ、いずれも甲幅10mmほどの個体で、地色はクリーム色で同じようですが1個体は茶褐色、2個体は褐色のモザイク模様がありました。種を調べようとネットで検索しても様々な種を比較できる情報が乏しく、数日かけて調べた結果、スナガニ科のスナガニ、ツノメガニ、ナンヨウスナガニのいずれかであると思われました。ツノメガニ、ナンヨウスナガニは近年生息域が北上しているそうです。本会の中野環さんにも写真を見てもらいあれこれ教えてもらいましたが、幼体であることから同定の決定打がありませんでした。かくなる上は育てあげるしかない! とい

うことで飼育モードに突入しました。観察を続ける10月13日、茶褐色模様の個体の脱皮を確認し、しめしめと思った矢先、一緒に入れていた他の個体に食べられてしまいました。それまで争いや、まして共食いをするような様子は一切見られなかったので安心してきっていました。このころはいろいろ調べた中で、茶褐色模様のものはナンヨウスナガニ、褐色模様はツノメガニではないかと想定していた時でした。唯一の個体を失くしてしまい、標本すら残せなかったその状況に諦めきれず、10月23日に新鹿海岸で再度採集を決行して10数個体を採集しましたが、すべて褐色模様の個体で茶褐色模様のものは確認できませんでした。また、甲長25mmほどのオスの個体も採集でき、甲羅の形状や模様はツノメガニのものと思われましたが、眼柄先端に見られるという突起はありませんでした。さらに11月5日にも小雨の中探してみましたが、この時は全く採集できませんでした。また、夏に比べて巣穴の分布域や数も減少していたように思います。中野さんにお聞きしたところ、カニも冬眠すること、また天気の悪い日は巣穴の奥に潜んでいるとのことでした。巣穴の減少については、南方の生息種であることから気温が下がって死滅したのか、冬眠中なのか、あるいは海岸に生息するトビやカラスに捕食されているのか、いろいろな要因が考えられ、興味あるところです。

小さな個体については年が明けた現在も飼育中ですが、歩脚の付け根が妙に赤い個体があり、写真撮っておこうとシャーレに入れたところ赤みが薄くなって消えてしまい、カニの血は赤くないのになぜ？もしかして体色を変化できるのか？など興味が尽きず日々楽しんでいます。

さて、あれこれ探して入手した図鑑により、甲にW字模様があるものがナンヨウスナガニ、甲の下部に一对の白い斑紋のあるのがスナガニ、同様に一对の褐色の斑紋のあるものがツノメガニであることがわかりました。また、ツノメガニの突起は雄の成体で見られるものの、九州以北では突起が未熟な若い個体しか確認されないことも記されていました。結果、今飼育中の個体はスナガニ(写真1)、ツノメガニ(写真2)である可能性が高く、食べられた個体はナンヨウスナガニ(写真3)ではなかったかと思われます。ツノメガニ、ナンヨウスナガニは徐々に生息域を北に拡げているとのことなので、この春から新鹿海岸に出かけこれらの種の同定までこぎつきたいと思います。

引用文献

渡部哲也2014. 海辺のエビ・ヤドカリ・カニハンドブック(電子版). 文一総合出版.

(うえだ としひこ: 津市久居一色町176-1)



写真1 スナガニと思しき幼体(甲の下部に1対の白い斑紋)



写真2 ツノメガニと思しき幼体(甲の下部に一对の褐色の斑紋)



写真3 ナンヨウスナガニと思しき幼体(甲に白いW字の模様)

マガキガイの大量打上げ

中 野 環

ここ数年で急激に個体数が増えたと感じる貝類のひとつにマガキガイがあります。房総半島以南の潮間帯下部に生息する殻長60mmほどの巻貝で、成長段階や季節に応じて生息場所を変えることが知られています (Wada et al.,1983, 和田,1986)。

私が南伊勢町で過ごした1970年代には、海水浴の時に、岩場の間に広がる砂地を探すとマガキガイを捕ることができ、岩場に棲むクボガイやバテイラなどの“いそもの”と一緒に持ち帰り、茹でておやつとして食べました。うま味があるのでたくさん食べたいのですが、一人あたり数個ほどしか食べることができませんでした。父親が「昔はもっと捕れたのに、おらんようになったわ」と言っていたことを思い出します。

みえ生物誌には1959年から2015年にかけて志摩市や南伊勢町、紀北町で記録があります。熊野灘沿岸では珍しい種類ではないのですが、その割にデータ数は多くはありません。10年以上記録がない期間もあり、特に1987年から2006年までの約20年間は記録がありません。和歌山県の磯では沢山見ることができると、三重県では長らく生きていた個体を見ることがなかったので消滅したものかと思ったほどです。2006年に刺網漁にかかった個体を見ることができ、個体群の回復を期待しましたが、2006年以降も、稀にしか得ることはできませんでした。2023年頃から志摩市から紀北町にかけての海岸に貝殻がポツポツと打上げられるようになりました。多い時には10個体以上も確認できるので、ようやく個体群が回復してきたのかなと思っていました。



写真1 マガキガイの帯



写真2 打上げられた個体

2025年12月25日、紀北町の砂利浜海岸で、打上げられた貝殻の帯が見えました (写真1)。近づくとマガキガイです。しかも、打上げられて間もないように生きていた個体が多くありました (写真2)。こんなにも多くの個体が打上げられているのを見たことがありません。

いったい何個体あるのだろうか？すべてを拾いあげ、正確な数を記録しなければと思いつつも、夜な夜な軟体部を除去するのはたいへんだなあ。腐敗が始まっている個体もある…。結局、やっかいだなあという気持ち勝ち、食用にできそうな生きていた個体を中心に、打上げられた1/3ほどを持ち帰ることにしました。久しぶりに大好きなマガキガイを食べられる！しかも数百個体も！思わぬクリスマスプレゼントに気分は高ま



写真3 持ち帰ったマガキガイ

りました。新鮮な個体は帰宅後直ぐに茹で、おいしくいただきました。持ち帰ったマガキガイの数は473個あったので(写真3)、1000を超える大量の個体が打上げられたこととなります。驚きです!

参考文献

Wada, K., R. Fukao, T. Kuwamura, M. Nishida and Y. Yanagisawa (1983) Distribution and growth of the Gastropod *Strombus luhuanus* at Shirahama, Japan. *Publ.Seto Mar.Biol.Lab.*,28 (5-6) : 417-432.
和田恵次 (1986) マガキガイの成長を追う成長とともに引越すジャンプの名人. *アニマ*, (164) : 37-41.

(なかの たまき : 度会町大野木1711-1)

「三重の植物2025」を作成しました

退職後のライフワークとして植物の撮影を続けてきました。花探しは大変楽しいものでまだまだ探したい花は沢山あるのですがきりがなく体力のあるうちにと本にしました。

「三重の植物2025」は三重県内に生育する維管束植物の図鑑風の写真集です。変種・亜種・品種・雑種を含めシダ植物(220種)、種子植物(2060種)を掲載しています。また参考として「植栽されている樹木(56種)、高山の植物(216種)」も掲載しました。APG IIIによる分類で科順の編集としました。

本はA4判で459頁です。オンデマンド方式のオールカラー印刷、無線とじ製本です。編集ソフトはインデザインを使用しました。印刷・製本は印刷会社に依頼しました。少量印刷のため価格は高額(18000円)になりますが、もし購入希望の方があれば予約販売を考えています。(予約は令和8年4月末までです)

興味がある方は次のメール(hiro_ike@nifty.com)等でご連絡ください。

(池田 博 : ☎519-0604 伊勢市二見町山田原307-2)



事務局から

○三県交流フィールドワークのご案内

6月27・28(土日)に尾鷲・熊野で実施します。詳細は同封の案内をご覧ください。最近、アメリカの大学生の参加も毎年ありけっこうにぎやかで。初めてでも楽しんでいただけたと思いますのでお気軽にご参加ください。

昨年のようなす(北山村) ▶



編集後記

鳥類の標本は事故死等の個体を丹念に収集することが唯一の方法で、剥製標本はまぎれもなく研究教育目的のためにあります。生息記録の最善の方法であるとともに、標本から組織を採取して分析することにより、系統分類の発展に寄与し、体内蓄積物質の変遷なども明らかにすることができます。上田さんの記事を読むと、博物館ならそれほどの無理をせずとも標本化できたのと思われませんが、入手に動いた風ではないですね。博物館側の事情もあるでしょうから、ぜひお聞きしたいです。次号は6月発行予定ですので、お気軽にご投稿下さい(善)。

自然誌だより147号 Mie Natural History Research Group News, No.147

発行日 2026年3月25日
事務局 ☎515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp